国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成24年3月1日発行　第36巻第3号通巻第414号

月刊みんぱく

2012 3月号

特集 複製・復元・再現

未来につなぐ複製の思想　久保 正敏
民博の一〇分の一民家模型　杉本 尚次
歴史を展示する　小島 道裕
原爆で消滅した爆心の町と暮らし　田邊 雅章
言語の復興　庄司 博史
香りの再現と創造　中島 基貴

エッセイ 千字文

鉄道至上の道楽人生

原 信太郎（はら のぶ たろう）

幼いころから鉄道好き、一三歳で始めた鉄道模型の製作と収集の結果、今では世界的なコレクターとよばれている。自作した一〇〇〇両を含む六〇〇〇両ほどのなかから約一〇〇〇両が、横浜にて本年夏開館予定の「原鉄道模型博物館」で公開され、鉄道ジオラマ（レイアウト）で走る。わたしの自宅にも一〇〇畳のレイアウト「シャングリ・ラ鉄道」がある。

わたしは、鉄道のメカに強く惹かれ、模型を作る際も、実物の動きの再現に力を注いできた。動力機構についても、実物同様の惰力走行が可能なギアを設計・自作したり、台車と車体をつなぐ揺れ枕や車軸を収める軸箱も、バネを自作して可動式にしてある。こうした細工は小さな模型では難しいので、1／32前後の大縮尺・軌間四五ミリの一番ゲージにこだわってきた。車体外観・内装も詳細に再現してあり、写真に撮ると実物と見まがうのも自慢の点だ。

自宅には、海外からあつめた鉄道雑誌、地図、写真、映像、鉄道関連グッズも数多く所蔵している。わたしが、多くのヨーロッパ系の言語を読み書きできるのも、海外の資料や地図を読みたいから。歴代の静止画や映画カメラが揃っているのも、世界各地の鉄道を撮るためだ。

プロフィール
1919年東京に生まれる。幼少期から現在にいたるまで、世界各地の鉄道模型を製作するとともに、鉄道関係の資料を求めて世界各地を訪れる。1990年、自宅内に自作・収集した鉄道模型、関係資料を収めた私設「シャングリ・ラ鉄道」を開設、2012年夏より非公開であったコレクションの一部を一般公開する博物館を設立予定。

工学系の大学を卒業したのも鉄道技術を学ぶためだったし、勤めた会社で印刷機の自動化や全自動倉庫を開発したのも、詳しかった鉄道技術の応用だ。開発過程でヨーロッパに出かけ、仕事の合間に鉄道探訪や模型屋探しに明け暮れた。ヨーロッパでは鉄道は大人の趣味として認知されているので商談がうまくいったり、列車の運転をさせてもらったりという余録もあったが、アジアなどでは、技術に詳しすぎるのでかえって怪しまれたり、ことばが通じない所だと官憲に捕まったりと失敗も数知れない。

しかし、技術的に面白い集電機構や台車がある南欧の田舎などを見残している。戦前の東京の路面電車の歴史資料も沢山残してあるので、鉄道文化史の記録として書き残したいし、資料をアーカイブズ化しておきたいし、やりたいことはまだ一杯ある。

家族に言わせると、写真、映像、オーディオなど、わたしの趣味はすべて鉄道へと向かう鉄道至上主義で、しかも金銭価値では測らないところが、究極の道楽たる所以。さらに、趣味者の多くが家族の理解をえられないなかで、妻がわたしの趣味を理解するよう子どもたちを育ててくれたおかげで、家族の支援のもとで道楽を続けられた。あらためて家族に感謝することしきりである。

月刊 みんぱく
3月号目次

1 エッセイ　千字文
鉄道至上の道楽人生　原 信太郎

2 **特集　複製・復元・再現**
2 未来につなぐ複製の思想　久保 正敏
4 民博の10分の1民家模型　杉本 尚次
6 歴史を展示する――現状複製と復元複製　小島 道裕
7 原爆で消滅した爆心の町と暮らし――失ったものを映像で復元　田邊 雅章
8 言語の復興――最後の話者をめぐって　庄司 博史
9 香りの再現と創造　中島 基貴

10 研究フォーラム
東日本大震災における民俗文化財のレスキュー活動
日高 真吾

12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
皇帝文化の象徴
台湾故宮博物院
高橋 智

15 みんぱく私の逸品
ホールマーク
伊藤 敦規

16 散策と思索の径
茨木の弁天さん――聖地の効用
中牧 弘允

18 多文化をあきなう
関西にフェアトレードを――「サマサマ」の心意気
小吹 岳志

20 歳時世相篇
ロシアの国際婦人デー
佐々木 史郎

22 フィールドで考える
アマゾンの森を歩く
池谷 和信

24 次号予告・編集後記

特集 複製・復元・再現

未来につなぐ複製の思想

久保正敏（民博 文化資源研究センター）

記憶をとどめ過去を理解する

日常の些細で何気ないモノやその周辺が何と愛おしいものか、失われてはじめてわたしたちはそれに気づく。失われるまえに現在の日常生活を見つめ、徹底的に記録する考現学を創始したのは、今和次郎であった。記録するだけでなく、記憶にとどめ、思い出すよすがとするために、人は、現物のかわりにさまざまな情報やモノを複製しようとしてきた。もし現物が眼前にない場合、複製は復元と言い換えられよう。そのためには、記憶や記録、想像力と総合力が動員される。記憶に頼らねばならない場合、シーンや具象的ではない情報を復元する場合は特に再現とよばれるのだろう。博物館の使命のひとつは、そうした記憶を集積し、そこから過去を理解し未来につなげる場を提供することだ。

展示の文脈でいえば、模型、複製、ジオラマなどがかかわる。複製物に関しては、従来、平面物は複製、立体物はレプリカと区別されてきたが、本特集に寄稿されている小島道裕氏は、原寸大で原品を複製したものならともにレプリカとよぶことを提唱し、資料の現状を複製する「現状複製」と、劣化や変形した資料の過去の姿を復元する「復元複製」があることも詳しく語っている。

ジオラマは、資料とその環境や背景を立体的に再現するものだが、その考案者ダゲールが、一九世紀に花開くかずかずの複製技術の端緒となる写真術を後に発明するのも、偶然ではなく、彼の熱意が同じ方向を向いていたからだろう。

しかし、ジオラマ、レプリカなどを用いて資料のコンテクストを過剰に再現すると、観覧者自身の想像力によるコンテクストの再構成をむしろ阻害する、という議論もある。

見る者の解釈に委ねる展示

本誌二〇一〇年一〇月号で紹介したように、梅棹忠夫は、レプリカは実物のもつ迫力と同等のものを作り出すとして是としたが、自然史系の博物館に多いジオラマについては、観覧者の総合的な理解を促すため、実際には同時に一緒に居ることはない動物の組み合わせやモノを配置するなど、現実と異なる情景を再現することがあり、そこにウソがあるとして排除する方針を示した。

こうした梅棹の考えの具体例が、民博におけるレプリカと民家模型だろう。たとえばオセアニア展示のモアイはレプリカだが、必ずしも正確な実測によるものではないと聞く。しかし撮影スポットとして観覧者の方々に依然人気がある。それはレプリカの迫力によるものか、観覧者のもっているモアイのイメージを再確認するための実物の代用か。また、日本展示にある四つの民家模型は、次の頁で杉本尚次氏が語るように、一九七四年一一月初旬の生活の現状を徹底して再現したものだが、そこでも現状模型か復元模型かが問題となった。調査時点で既に養蚕農家を廃業し民宿となっていた合掌造り民家を現状どおりに模型化するかについての激論は、

日本の文化展示場にある合掌造りの民家模型（富山県南砺市相倉）。調査時、この家は内部を一部改造して民宿を経営していた。H0009514

一九八〇年四月刊行『季刊民族学』一二号で川添登氏が詳しく述べている。しかしこの徹底再現においても、クソリアリズムではなく、現実からの間引きという抽象がおこなわれ、観覧者それぞれにイメージを再構成できる構造展示の思想が貫かれている、という点が示唆的だ。すなわち、抽象化があるからこそ、自分流のイメージ形成に自由度が生まれるという。

そこに、政治性、時代性が入り込み、作り出す側と見る側との相互作用や共同作業の生まれる余地がある。すなわち何らかの抽象化を伴う複製や復元作業は、その時代や考え方を反映し、見る者が共有している、あるいは共有したいと願うイメージとの相互作用を伴うのだ。それは、知りたいこと、忘れたくないことを強調する一方で、知りたくないこと、忘れたいことを捨象する働きももつだろう。このようにして、それぞれの時代の見方を投影し、見る者の自由な解釈を許すような復元や複製は、時間を超えて飛翔していく。そうすることで、実際には劣化し失われていくモノに永続性が与えられる。こう考えると、複製・復元・再現とは、永遠ではない人やモノの命と引き替えに、未来を作り出そうとする営みであるのかも知れない。

前頁の合掌造り模型の正面には、民宿勇助の看板も徹底して再現されている

日本の文化展示場にある奈良盆地の大和棟民家模型（奈良県天理市）。H0009512

民博の一〇分の一民家模型

杉本尚次　民博 名誉教授

討論を重ねた日々

一九七七年の開館をめざして各展示の準備を進めるなかで、日本の文化展示については「日本の民家」を展示の核としてとりあげることが決定しており、日本の文化展示プロジェクトチームでは、その展示方法をめぐって種々討論が重ねられていた。家の実物を移築して屋外に展示する野外博物館方式が最良だが、万博記念公園内では博物館屋外に建物を建てるには法規上の難しい問題があり、敷地や予算の関係もあったので、単なる小縮尺の模型ではなく、一〇分の一縮尺の精密な民家模型を作ることになった。まず代表的な民家の選定だが、諸先学の資料やわたしが日本各地で調査していた民家のなかから、地方色を示す代表的なものを二〇選び、討議の末一〇にしぼった。

このなかから日本文化を代表する民家といえるものとして、曲家、合掌造り、大和棟、二棟造りの四つを選び、一〇分の一民家模型を作ることになった。民家模型というと、小さなものを想像しがちだが、一〇分の一ともなれば家を建てるに等しい精度が求められる。プロジェクトチームでも建築構造を主にした復元模型か、現状模型かをめぐって討論を重ねたが、梅棹忠夫館長は「建築の博物館ではなく、民族学博物館の展示だから、現状のあるがままを徹底して再現し、生活のイメージが伝えられる模型にしよう。比較可能なように調査時点を定めて再現しよう。例え現在民宿をしている民家であっても、何十年かたてば民俗資料となる」といわれたことを思い出す。

知恵と努力の結晶

開館までに模型を完成させるには短期の集中的な調査が必要であった。そこで模型製作を担当したトータルメディア開発研究所は、民俗学者宮本常一門下の真島俊一らが作った集団「テム」（一九七四年、株式会社TEM研究所に改組）を中心とする調査団を編成し、四つの民家模型の現場へ出発した。

「テム」は、それまで、南佐渡小木町の民家約二〇〇戸を数千点の民具とともに精査し、日本生活学会から第一回今和次郎賞（一九七五年）を受賞するなど、文化財や、民具、道具の調査・研究を進めており、そのノウハウが期待されたのである。各調査地では実測から面接聞取り、民具類の計測等々基礎資料だけでも膨大なものになった。調査期間は一九七四年一一月初旬にほぼ統一した。生き生きした生活のある姿を示すため、母屋だけでなく土蔵や納屋などの付属建物、屋敷林や石垣など屋敷地全体をセットにして考えることにした。さらに家具、調度に至るまで、それぞれの場所に置く必要がある。一〇分の一という縮尺だから、目に見える所に置かれる生活用具数だけでも数百点になる。その全体を模型化すると雑然としたものになるので、これもほぼ一〇分の一に間引きして数十個を選び出して模型にしてある。何を選び、何をカットするかは、民博の日本チームと製作者側とのあいだで意見交換をしている。このようにして民博の一〇分の一民家模型はフィールドの人たちの協力をはじめじつに多くの人びとの知恵と努力によって完成した。

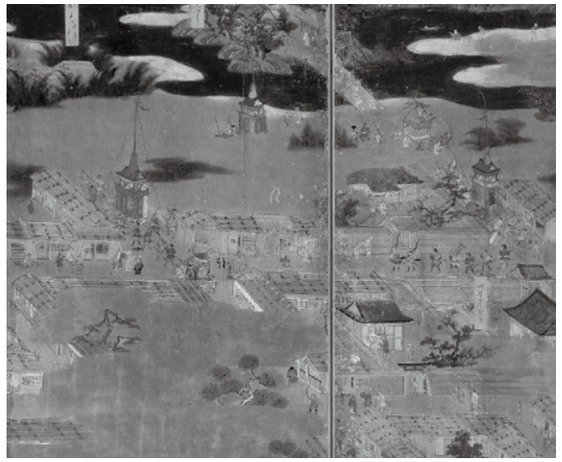
見る人の想像をうながす展示

四つの民家模型は、いずれも季節を一一月初旬に統一してあるので、比較すると、曲家の屋敷にある樹々は色づき、棟の芝草は枯れ、深まりゆく東北遠野の秋の情景を示している。合掌造りの山里は厳しい冬に備えるころ。奈良盆地の大和棟は秋の陽をうけた高塀の白壁と柿の木が印象的。沖縄八重山の二棟造りはサンゴの風化した白砂。福木の防風林や咲き乱れるハイビスカスなど、南北に細長い日本列島の風土性、地域性がよみとれるようになっている。

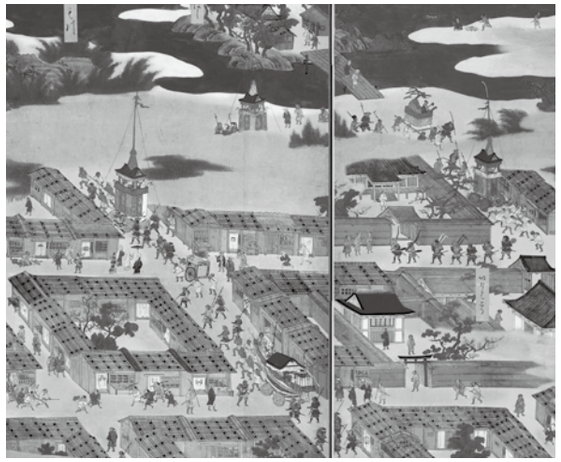
開館当初の民博を紹介した朝日新聞の記事「世界を知る――モノと文化」によると、「民博の民家模型には、現にそこに住む人間の、昔と今とこれからの生活について見る人の想像をうながしている」と評されている。

歴史を展示する
―現状複製と復元複製

小島道裕（こじま みちひろ）　国立歴史民俗博物館教授



洛中洛外図屏風歴博甲本の現状（部分）。変色が激しく、左下の部分は欠失して稚拙な後補になっている（国立歴史民俗博物館 所蔵）



同じ部分の復元複製。後補部分は、オリジナルに近いと思われるものに変えた（岩永てるみ氏・阪野智啓氏による）。他の図像も見やすい

イメージ作りを手助けする展示

歴史を展示するのはとても難しい。なぜなら、歴史とは実際に存在するものではなく、人びとが思い描くイメージ、「歴史像」に過ぎないからである。ではイメージを形にすればよいかというと、それは違う。それは誰かのイメージなのだから、そんなものを押しつけられても困ってしまう。つまり、歴史展示とは存在するものを展示する展示ではなく、イメージを作るための手助けをする展示、ということになる。

では、何を展示すればそれが可能になるだろうか。歴史は存在しないが、歴史資料は存在する。研究者は資料から意味を読みとって歴史像を作るのだが、しかし、土器や古文書のような歴史資料は、それを展示しただけでは、だれが何のために作ってどんなふうに機能していたのか、といったことはよくわからない。そこで、資料だけではなく、意味を説明するパネルを補ったり、使用状況を示す立体模型を作ったりすることになる。

現状複製と復元複製

これを逆に考えると、展示においては、歴史資料は意味を示すための素材だ、と割り切ることもできるため、実物でなくても、見た目が同じように作った複製（現状複製）でも意味は示せるのではないか、その方が、原品を占有したり、劣化させたりしなくてすむ、という考え方が成り立つ。その考え方を一歩進めると、必ずしも現状どおりでなくても、色や形を本来のものに戻した方がわかりやすいのではないか、という考えも出てくる。これが「復元複製」で、筆者の所属館では両方を目的によって併用している。

ただ、復元はやはり制作者のイメージに過ぎず、一〇〇パーセント正確な復元というものはありえないし、経年変化や使用の痕跡こそは歴史の立派な証でもあるから、復元は「本当はこうだった」というものではないことも理解していただかなければならない。あくまでも、現状からさまざまな方法によって推測を加えることで、「当初はこうだったかもしれない」という、元の状態、その機能、そしてそこから見えてくる歴史像を、考えるための「よすが」として作っているに過ぎないのである。

「本当はどうだったか」は、所詮わからない。しかし、それを考えてみることはできる。その過程を共有することができるなら、イメージの押しつけではない、「歴史を考えるための展示」が可能になるだろう。そう考えながら、展示の仕事を続けている。

原爆で消滅した爆心の町と暮らし
―失ったものを映像で復元

田邊雅章（たなべ まさあき）　爆心地復元映像製作委員会代表

わたしの使命

広島県産業奨励館（現在の原爆ドーム）に隣接した家屋で生まれ育ち、原爆により家族や暮らしのすべてを奪われ、映像作家（記録映画製作者）の道一筋に生きてきたわたしにとって、爆心地復元事業は逃れることのできない「宿命」であり、生き残った者の「使命」でもあった。

一九九八年、原爆ドームは世界遺産に登録され、内外から注目されることになったが、被爆以前の状況については白黒写真がわずか残るだけで、「産業奨励館」の実態や詳細な情報は不明とされていた。その年ちょうど還暦を迎えるにあたり、それまで誰も手がけていない、自分にしかできない仕事があることに気が付いた。

人間を通じて描く

被爆の実態を後世に伝承する目的で史上初の「爆心地復元事業」にとり組み、一五年におよぶ歳月をかけて〝在りし日の町と暮らし〟を映像でよみがえらせる。被爆以前、直後の破壊と消滅、現在の状況とを対比することで、原爆によって失ったものの大きさを立証することができた。

復元事業に当たっては「一次情報」にこだわり、当時を知る自分自身が被爆生存者や元の住民など、全国規模でじつに三〇〇名を上回る人びとから直接聞きとり調査をおこない、その証言を映像におさめた。脳裏から離れない悲惨さと過酷な実体験だけに困難を極めたが、その証言映像をもとに記録映画を構成、時代背景や生活環境の表現手段としてCG画像を作成した。

時空を超えて〝記憶を多角的につむぐ〟そして、米国立公文書館などで収集した当時の写真のなかから、記憶を科学的に裏づけるものを捜索する。それは、気の遠くなるような作業の連続だった。

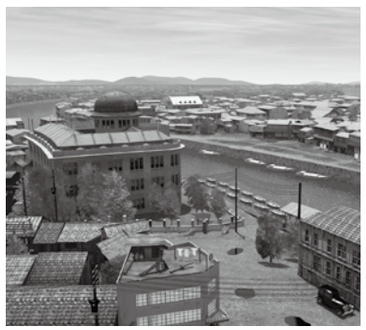
CG画像の作成では、全国の「伝統的町並み保存地域」をすべて訪れ、江戸、明治、大正、昭和の町並みや家屋の建築様式を詳細に調査し、それぞれの年代の雰囲気、質感、経年変化を再現するうえでの参考にした。さらに「当時の音」も探し出し、見つからない音は記憶を頼りにつくり出して映像表現特有の効果を図った。

映像（画像と音の組み合わせ）による復元事業、それは人間の感性と共鳴させる「疑似体験」なのである。したがって素材は「真実」「誠実」「純粋」「正確」が求められ、基本的には「人間を通じて描く」姿勢と理念が重要なのである。

○復元事業の詳細は、拙著『ぼくの家はここにあった』（朝日新聞出版社）、『原爆が消した廣島』（文藝春秋）をご参考にされたい。

現在の原爆ドーム。元安川を隔てて平和記念公園が見える

原爆投下直後の爆心地付近惨状（米国立公文書館 所蔵）



被爆以前の広島県産業奨励館界隈と対岸に中島（CG 画像）

言語の復興——最後の話者をめぐって

庄司博史　民博 民族社会研究部

サモエード語系のカマス語は数十年の空白のあと一九七〇年代に突如、シベリアのある村で唯一の継承者、クラフディア・プロトニコワさんが「発見」され、学界の話題となった。その後カマス語は言語学者により綿密に記録されたが、一九八九年九月二〇日、彼女の死とともに地上から消えた。言語の死の瞬間が正確に記録された一例である。今まで人類史のなかで、何万、何十万の言語が生まれては消えてきた。ほとんどの言語は記録も残さず、その臨終のようすも知られていない。

ことばの危機

今日、言語学者以外の人びとも巻き込んで論議されている言語復活の話題がある。話者の減少により消滅の危機にあることばを、話者数の回復により活性化しようとする試みである。現在一説では七〇〇〇もあるといわれることばの約半数が一〇〇年ほどのあいだに消滅するとの予想がたてられるほど、多くのことばが消滅の淵にあるが、ほとんどのケースは、より有力で広く通用し、便利な言語への話者の移行によっている。

しかし一方で言語はそれぞれ話者たちの世界観や知識のささえであり、民族や国家など集団のよりどころであるとして、その消滅は人類にとって取り返しのつかない損失であるととらえる人も少なくない。また各言語の消滅の過程では、価値のないことばとさげすまれ、ことばをかわせる仲間を次第に失ってゆく話者の心のいたみが指摘される場合もある。

話者を取りもどす

一九九〇年代、このような少数言語の危機が叫ばれ始めたころ、社会言語学者J・フィシュマンの提唱で、逆行的言語シフト、つまり話者の回復のためのさまざまな方策に多くの関心があつまり、各地で消滅の危機にある言語にためされてきた。日本でもアイヌ語や琉球語などの復活について今も盛んに論じられている。

じつはそれまでも、ブリテン島のコーンウォール語など、すでに消滅したことばを回復しようとする試みがあった。しかし成功した例としてはヘブライ語が知られているのみである。これも話しことばとしては二〇〇〇年近く途絶えてはいたが、書きことばとしてはユダヤ人のあいだで使われ続け、イスラエルの建国という強い意思と政策があったことで実現したものだ。一日消えてしまったことばの復興はむずかしい。そうなる前、少しでも話者のいるあいだに社会の全面的なテコ入れが必要だ。

特定の言語の未来を危惧する人びとは、消えかかったことばを記録し、文法書、学習用の教科書や読み物をつくり、子どもたちには民族語の大切さを語りかける。少数言語や話者の権利をうたう国際条約や憲章を制定し、ことばに公用語、先住民族語などの地位をあたえて教育やメディアへの採用を働きかけてきた。しかし、そのような努力があっても最後の言語選択決定権は話者にある。人びとは言語愛好者の思い入れや権力の働きかけには容易にはのらない反面、英語のような「国際語」や「かっこいい」という目先の流行に簡単にのってしまうこともある。

とはいえ、多言語社会を提唱し、長年地道な少数言語擁護運動を続けてきた西ヨーロッパでは、ウェールズ語やカタロニア語など、危機にあるといわれながら今日、地域公用語として勢いをつけ始めたことばもある。言語の復興——けわしいが頂上に到達できない山ではない。

香りの再現と創造

中島基貴　大分香りの博物館元館長

香りの要素

香水、石鹸、芳香剤など、製品の香りをフラグランスと総称する。これらの香りは、天然香料、合成香料、調合ベースなどの香料素材を、二〇〜一〇〇種類くらい調香して作られる。素材の選択、香りの強さ、拡散性、調和、嗜好性、安定性、安全性を考慮し、独創性のある香料を研究し創作する人を調香師（Perfumer）とよぶ。

調香師は約三〇〇〇種類の素材の香りを嗅ぎわけることが出来る。昆虫や動物のもっている特定のニオイに対する感度にはおよばないが、彼らは訓練をへて、微量の成分をも嗅ぎとることが出来るようになる。人はいろいろな香りを体験し、香りを文化として記憶しているのだ。

香りを記憶する

調香師の仕事は、まず香料素材を一品ずつ記憶することからはじまる。たとえばオレンジ系の香りの場合、素材となるオレンジの品種、産地、精油の製造法、精油の蒸留法などにより、香りの特徴、強さ、価格などが異なる。これら素材の香りを識別し、それぞれの特徴をまず記憶する。普通、オレンジ素材として二〇種類位を使用する。

次に、二種類の素材を配合したときにどのような香りが出来るか考察し記憶する。さらに、三種類の素材の原料の組み合わせでどのような香りが出来るかを考察し、記憶していく。そして除々に配合する素材の数を増やしていく。こうした、素材を組み合わせてバランスのとれた香りを作り出す研究をAccord（英語でアコード、フランス語でアコール）研究という。組み合わせの体験と記憶を繰り返しながら香り作りが出来るようになるのに、三〜一〇年くらいかかる。いろいろな香りを経験することにより、香り製品を創作することが出来るようになっていく。

鍵は天然の香り

一流の調香師は、提示された香料（香り）を観察することにより、かなりの精度でその香料の再現をおこなうことが可能である。香料をムエットとよばれる紙につけて、トップノート（香りをつけて三〇分以内の香り）、ミドルノート（三〇〜一二〇分の香り）、ベースノート（二時間以上）と観察し、さらに二日間位観察して処方を作成し、調合し、再度比較して香りの違いを観察し、処方を修正する。

最近ではGC/MS（ガスクロマトグラフ／質量分析計）の分析結果も加味して処方が作成されている。GC/MSの導入により、提示された香りの再現が飛躍的に早くなった。しかし、香りの再現には、GC/MSでも分析出来ない微量に含まれた天然香料を特定することがひとつの鍵になる。それが出来るのは、天然素材のアコードの記憶が確かな調香師なのである。

独創性のある香りの創作

画家が、絵の具をつかいモチーフにそった作品を生み出すように、調香師も、素材を駆使し主題にそった香りを創作する。この場合、創作した香りと、その独創性が評価される。使用可能な素材だけでオリジナリティーのある香りを創作することは、非常に難しくなっている。そのため、使用する天然香料の蒸留、抽出などの独自の原料の開発や新規合成香料の開発にも力をいれ、オリジナル香料の開発に注力しているのだ。

研究フォーラム

東日本大震災における民俗文化財のレスキュー活動

日髙 真吾（ひだか しんご）
民博 文化資源研究センター

保存学をはじめとする各分野の専門家は、1995年の阪神・淡路大震災をきっかけに、
被災した文化財を救出し、復興させるための研究を本格的におこなってきた。
甚大な被害が発生した東日本大震災では、これまでの知見にくわえ、
より多くの人びとの協力と長期的視野にたった取り組みが必要だ。
震災から１年をへた現在、文化財の復興のためにもとめられるものとは。

被災文化財の支援活動

未曽有（みぞう）の被害を引き起こした東日本大震災では、多くの文化財も被災した。そして、これらの被災文化財のなかには民俗文化財も含まれる。

わたしは今回の東日本大震災に対して、文化庁の呼びかけで結成された「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会（本部：東京文化財研究所）」（以下、救援委員会とする）にメンバーとして参加した。これは、人間文化研究機構が救援委員会に協力することを決定し、活動費を予算化したことで実現したものである。救援委員会でのわたしの活動は、民俗文化財の保存の専門家として、おもに民俗文化財のレスキューを担当することとなった。

被災民俗文化財のレスキュー活動

救援委員会がおこなう被災文化財の支援活動は、文化財レスキュー事業として位置づけられた。レスキューの対象は有形の動産文化財であり、それらを救出、一時保管、応急措置を実施することが救援委員会のおもな活動内容である。ただし、ここで文化財とするものは、市町村指定や県指定、あるいは国指定といった指定文化財だけを指すものではない。指定されていないものであっても、被災地において文化財としての価値づけができると判断されるものは、すべてレスキュー事業の対象としたのである。

津波で壊滅的な被害を受けた文化財収蔵庫

救出活動は、まず、周囲のがれきの撤去作業で巻き起こる粉塵（ふんじん）やヘドロなどの匂いへの対処、暑さ、さらには破傷風の懸念に直面する作業となった。また、電気もとおっていない被災した博物館施設での作業は、真っ暗な場所が多く、床にがれきが散乱する不安定な足元と天井からの落下物にも備えなければならない。そのため、マスクはもちろん、ヘルメットや長そで・長ズボンの作業服、分厚い作業手袋や安全靴、ヘッドライトなどの装備が必要となる。このような環境のなか、床に散らばっているガラスの破片を取り除き、津波が運んできたヘドロをかきだしながら、埋もれている民俗文化財をひとつずつ探しだしていくのである。

一時保管の作業は、被災現場から一時保管場所へ移送することが中心となる。被災現場となった施設では、がれき撤去などの作業が進められると、がれきに混入した文化財も一緒に廃棄されることがある。また、残念ながら火事場泥棒のような輩（やから）がどうしてもでてきてしまい、文化財の盗難ということも発生する。したがって、被災現場から救出した文化財を、施錠できる安全な施設に一時保管するのである。

救出した文化財の移送作業

応急措置は、救出後の被災文化財の劣化が進まないように必要最小限の保存措置をおこなう作業である。東日本大震災で救援対象となった文化財のほとんどは、津波で被災したものである。したがって、救出時の文化財はヘドロや砂の付着をはじめとする表面の汚損、被災後からの時間の経過で発生したカビによる生物被害というものが観察された。また、地震や津波の衝撃による破損や棚からの転倒や落下の衝撃による破損も確認された。わたしが担当したレスキュー事業対象の民俗文化財は、宮城県、岩手県を合わせて約五〇〇〇点。これらの民俗文化財の応急措置を雪の降り始める季節までにはどうしても終わらせたい。そのためには作業人員の確保が必要となるが、そうなった場合、文化財の保存修復の専門家だけではとても対応できない。そこで、民俗文化財の応急措置では、一番の汚損原因となっている文化財の表面に付着したヘドロや砂の除去、繁殖しているカビの殺菌処理を最優先にすることとした。そして、実際の作業は、日本博物館協会に所属している全国各地のミュージアムの学芸員の方とおこなった。

今後の文化財レスキュー活動

現在、文化財レスキュー活動は、多くの文化財関係者の協力によって、一段落し、次の活動へと向かう転換期となっている。これまでの活動はあくまでも緊急事態のなかでの活動であり、被災文化財が本来の文化財的価値を取り戻したわけではない。ようやく、被災文化財が本来の文化財的価値を取り戻すための活動のスタート準備ができたという段階である。そこで、次の活動では、保存科学の研究者としては、津波に含まれた塩分がどのような劣化を誘引させるのかを明らかにし、本格的な保存修復方法を考えていきたい。また、民博に所属している研究者としては、この震災の記憶を後世に伝えるため、震災前の生活の記憶、震災後の復興活動をテーマとした企画展やシンポジウムを開催したいと考えている。

これから本来の生活環境を復興させていかなければならない被災地では、もう少し外からの支援活動が必要だと思う。民博の教員であるわたしができることは何か、被災地の復興活動の邪魔にならないような支援活動の在り方を考え、実践していきたい。

公開シンポジウム
「文化遺産の復興を支援する
——東日本大震災をめぐる活動」
2012年3月17日・18日　国立民族学博物館

東日本大震災被災文化財の救援と復旧のための募金活動をおこなっています。
公益財団法人　文化財保護・芸術研究助成財団　http://www.bunkazai.or.jp/

みんぱく Information

無料ゾーンが拡大！インフォメーション・ゾーンが3月15日、生まれ変わります。ヨーロッパ展示もパンのコーナーなどもうけ、リニューアルします。「学習コーナー」は「探究ひろば」に変わり、みんぱくの研究活動や展示をよりよく知ることができるようになります。

特別展

「今和次郎　採集講義――考現学の今」

今和次郎が関東大震災後に始めた考現学は、世相を野外観察、記録して庶民の生活文化の変化をとらえる学問で、民族学とよく似ています。この特別展は、青森県立美術館とパナソニック汐留ミュージアムで開催された展示に加え、新しい手法も取り入れたみんぱくの考現学的な資料や研究を紹介し、モノと生活文化の関わりを考えます。

会期　4月26日（木）～6月19日（火）

「たっぷりアメリカ――春のみんぱくフォーラム2012」

会期　3月25日（日）まで

■関連イベント

◆研究公演

「ホピの踊りと音楽」

米国から先住民ホピを迎え、踊りとフルート演奏を披露してもらいます。本格的規模の編成では日本初公演。本館展示場で作品展示中の宝飾品作家も歌い手として参加します。

日時　3月20日（火・祝）
13時30分～16時15分（開場13時）

場所　講堂（定員450名）

※参加無料、要申込

申込締切　3月8日（木）必着

参加申込方法

往復はがきに住所・氏名（返信用おもてにも）・年齢（任意）・電話番号・参加希望人数（本人を含めて4名まで）と研究公演タイトル・実施日を書いて広報企画室企画連携係までお申し込みください。応募者多数の場合は抽選となります。

◇「国立民族学博物館友の会」維持会員および正会員の方は優遇枠がありますので、会員番号もご記入ください。

お問い合わせ先
広報企画室　企画連携係
電話　06・6878・8210

◆**みんぱくウィークエンド・サロン**

詳細は本誌24ページをご覧ください。

みんぱく公開講演会

「ヨーロッパと日本の宗教――問いなおされる救済のかたち」

日時　3月16日（金）
18時30分～20時45分（開場17時30分）

会場　オーバルホール（大阪・梅田 毎日新聞社ビル地下1階）

定員　400名

※手話通訳あり。参加無料、要申込

参加申込方法

詳細はホームページ、チラシでご確認ください。

お問い合わせ先
研究協力課　研究協力係
電話　06・6878・8209

シンポジウム

「文化遺産の復興を支援する――東日本大震災をめぐる活動」

東日本大震災で被災した多くの文化遺産の復興に対して私たちは、支援活動を実施してまいりました。本シンポジウムでは、この1年間の活動を紹介し、災害と文化について考えます。

【第一部】

日時　3月17日（土）　13時20分～17時

場所　第5セミナー室（80名）

※参加無料、要申込

【第二部】

日時　3月18日（日）　10時20分～16時30分

場所　講堂（350名）

※参加無料、要申込

参加申込方法

ホームページ上の申込フォーム、またはチラシの「FAX申込書」に必要事項をご記入の上、お申し込みください。

ワークショップ

「点字でモテモテ――さわって、つくって、つたえる点のアート」

点字は視覚障害者用の触覚文字です。しかし、規則的に並ぶ点の配列は美しく、デザインとしても楽しめます。自然の素材を用いて、ちょっと不思議な「点のアート」作品を創ってみましょう。

日時　3月31日（土）　10時30分～16時
（受付10時開始）

場所　ナビひろば ほか（定員　15名）

※参加無料、要申込（詳細はホームページにて）

※小学2年生以下は保護者同伴で参加可能。

お問い合わせ先
情報企画課 展示グループ
電話　06・6878・8532

みんぱく春の遠足・校外学習　事前見学&ガイダンス

春の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。新しくなった展示についても研究者が展示場で説明します。

実施日　4月3日（火）4月5日（木）
4月6日（金）

時間　14時～17時

場所　第5セミナー室 ほか

参加申込方法

みんぱくホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお申し込みください。

お問い合わせ先
広報企画室 広報係
電話　06・6878・8560

●無料観覧日のお知らせ

3月18日（日）は万博公園ふれあいの日のため本館展示を無料で観覧いただけます。

＊電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時（土日祝を除く）です。

刊行物紹介

■西尾哲夫 著

『世界史の中のアラビアンナイト』

NHK出版　定価：1,155円

アラビアンナイトを今日まで伝世させたのは、魔法が横溢する中東風の異世界幻想ではなかっただろうか。中東に萌芽し、西欧植民地主義によって変容した世界文学の成立過程を、世界史のダイナミズムの中に描き出す。

■岸上伸啓 著

『北極海の狩人たち ―クジラとイヌピアットの人々―』

風土デザイン研究所　定価：2,700円

本書は2006年から始めた現地調査をもとにイヌピアットの捕鯨の現状、獲物の分配、世界観、捕鯨をめぐる厳しい環境条件と政治条件について紹介した本である。また、アラスカ先住民の歴史や文化についても紹介している。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です）

第406回　3月17日（土）

文化とアイデンティティ――ビルマ／ミャンマーの今

講師　田村克己（国立民族学博物館 教授）

東南アジアのビルマ（現国名ミャンマー）は、新しい憲法の公布、総選挙を経て「民主化」と新しい国づくりに向けて一歩をふみ出しています。そのなかには、世界遺産へ登録申請など、国際社会へ加わろうとする動きもみられます。この国の今につき、さまざまな文化の動きを通して述べます。

王朝時代の「獅子の玉座」。伝統と文化を象徴する

第407回　4月21日（土）

サハリンのキムチ

講師　朝倉敏夫（国立民族学博物館 教授）

かつて樺太とよばれたサハリンには数万人の朝鮮半島出身者がいます。彼らはどうしてサハリンに渡ったのでしょうか。そして、どのように暮らしているのでしょうか。彼らの民族食であるキムチを通して、その歴史と生活についてお話しします。

家庭でキムチを作るサハリン韓人

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）

会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第406回　4月7日（土）14時～15時

ベトナム北部山地における盆地民と山地民

講師　樫永真佐夫（国立民族学博物館 准教授）

この地域では、土地の高低に応じて、言語や習慣の異なる民族がたがいに関わり合いながらすみわけてきました。たとえば盆地民の黒タイは機織りで有名ですが、サーと彼らがよぶ山地民たちがしばしば綿花を供給してきました。両者のふかいつながりについて、伝承なども紹介しながらお話しします。

※当日はキットとよばれる織物をじっさいにご覧いただきます。

第407回　5月5日（土）14時～15時

【特別展「今和次郎 採集講義」関連】

考現学と民族学

講師　久保正敏（国立民族学博物館 教授）

東京講演会

第101回　4月15日（日）14時～15時

【ビデオテークより】

ペー族の映像民族誌――制作過程で考えること

講師　横山廣子（国立民族学博物館 准教授）

会場　モンベル渋谷店5Fサロン

定員　50名（要申込）

第102回　6月9日（土）14時～15時

貨幣経済を問う視点

講師　小林繁樹（国立民族学博物館 教授）

会場　江戸東京博物館学習室

定員　70名（要申込）

第80回民族学研修の旅

アドリア海交易のかがやき

――バルカンの歴史・民族を考える

5月17日（木）～26日（土）10日間

訪問先：ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、モンテネグロ、アルバニア

※お申込、お問い合せは上記友の会まで

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

米国南西部先住民ズニの石彫

今回はニューメキシコ州中西部の先住民ズニの動物を模した石彫をご紹介します。天然石や貝などの素材を用いて動物の形に仕上げる石彫は、宗教儀礼の用途ではフェティッシュ、商業用は石彫とよびわけられています。どちらも、その技術は代々受け継がれていて、商業用の作品には作者の名前が刻まれていることも特徴のひとつです。トルコ石などを素材とする石彫の動物やその色彩にはすべて伝統的に意味が込められていて、一つひとつ丹念に魂を込めて作られています。ズニの人びとは狩猟の成功や健康祈願といった祈りのためにフェティッシュを制作し、特別な場所で特別な人が魂を込める儀礼をおこないます。お気に入りの石彫を見つけに、ぜひミュージアムショップへお立ち寄りください。

※二月号掲載のチョコレートの価格に誤りがありました。正しくは五〇グラム二九〇円、一〇〇グラム五八〇円です。訂正しお詫び申し上げます。

写真中央	クマ	3,300円
左から	アライグマ	4,150円
	ウマ	1,100円
	カメ	5,500円
	ペンギン	4,150円

（すべて税込み）

皇帝文化の象徴
台湾故宮博物院

高橋 智（たかはし さとし） 慶応義塾大学教授

中華民国建国100年を祝う故宮博物院の前景

中華民族の代表的な遺産

台湾旅行には必ずついてくる故宮の参観。今や、大陸中国の人びとも自由に行き来できるようになって、「蒋介石（しょうかいせき）はどんなものを持ち運んだんだ」という好奇心から、年間百万人を超える参観者がフロアーを埋め尽くし、世界の故宮から、はたまた中国の故宮に返り咲いた感すら覚える。二〇一一年はとりわけ中華民国建国一〇〇年に当たり、辛亥革命以来、中華民族の代表的な遺産として顕揚され、巨大な観光産業としても国家財政の一翼を担っている。正式には「国立故宮博物院」という。民国時代、博物館を設立したとき、北京・南京の重要館を「院」として別格にした。もともと中国に美術館は醸成されず、台北故宮が美術館的色彩を持とうとしたのが、前政権のときであるが、やはり現政権のもとでは博物館に徹しているようである。文物の流れが政治の動向と密接にかかわる、これが中国のもっとも興味深い原則である。

文献館の前に佇立（ちょりつ）する蒋介石の像

一千年にわたる皇帝の蒐集

一九二四年一一月追われるように宮廷を出た最後の皇帝溥儀（ふぎ）が持ち出した文物と、宮廷に遺（のこ）った文物が離別する運命となった。皮肉にも持ち出したものが大陸に遺り、宮廷に遺ったものが、「南遷」して台北へ渡った。そもそも北京の故宮は紫禁城とよばれ、明時代、永楽帝（えいらくてい）の創建になる。河南省（かなんしょう）開封（かいほう）にあった北宋の宮殿、浙江省（せっこうしょう）杭州（こうしゅう）にあった南宋の宮殿、北京にあった元（げん）の宮殿、南京にあった明時代初期の宮殿にそれぞれ伝わった一千年にわたる皇帝の蒐集（しゅうしゅう）の最後が清朝末期の紫禁城そのものであった。戦乱・火災・略奪・盗難と想像を絶する歴史を経てその蒐集は終わった。一九二五年故宮博物院が成立、一九三三年から数次にわたり、日本の侵略を避け、故宮文物は南へ。一九四八年末から内戦を避け、台湾基隆（きりゅう）へ運ばれ、台中を経て現在の台北外双渓（がいそうけい）、緑豊かな、平和な閑静な地に居を定めた。国宝中の国宝である王羲之（おうぎし）「快雪時晴帖（かいせつじせいじょう）」や、西周代につくられたとされる「毛公鼎（もうこうてい）」、また数十万冊の古籍、など皇帝の主要な蒐集はここに含まれた。中華文化を極めた皇帝の蒐集と果てしない移動の経過とは、何を意味するものなのか、故宮の文物は美しさと重厚さの裏に奥深い何かを秘めているようだ。

文献館から望む故宮の主楼と事務棟（左）

みんぱく 私の逸品

ホールマーク

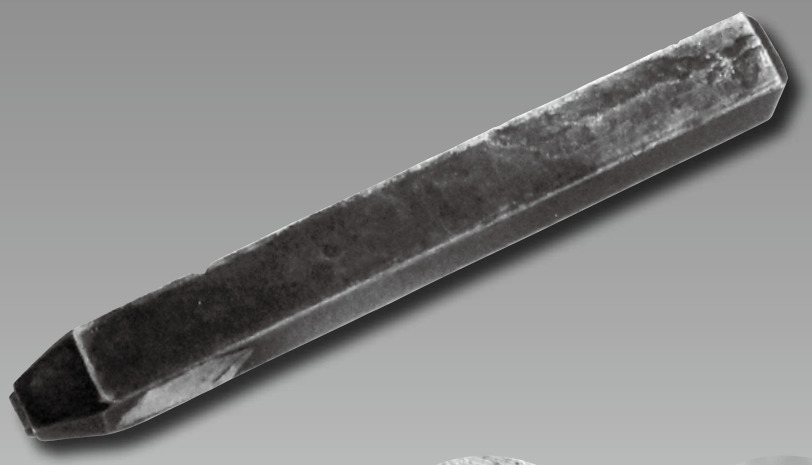
民博 文化資源研究センター 伊藤（いとう） 敦規（あつのり）

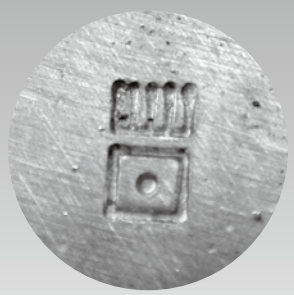
標本番号 H0268628
地域 アメリカ合衆国
受入年 2010年
本館展示場にて展示中

民博は現在、米国南西部先住民ホピのジュエリーを二六点所蔵している。今回紹介するのは完成品ではなく、鉄製の棒である。この棒は作品制作時に使用するものだが、単なる道具ではない。ホピのジュエリー作品の裏面などには、使用している金属の純度をあらわす印と、作家のイニシャルや所属している氏族のシンボルを示すホールマークとよばれる印が通常打ち込まれる。この道具は後者の作家性を証明するもので、作家が手放すことはほとんどない。

日本の銀行窓口で通帳から預金を引き出すとき、わたしたちは登録印を提出する。お金を引き出す人物と預金者が同一人物か特定する必要があるためだ。この関係と同じく、米国南西部先住民のジュエリー作家たちは、制作者が他でもないわたしであり、工場製のニセモノではなく手作りのホンモノであることを消費者に証明する目的で作品に落款を打ち作家性を保証する。

わたしはかつて、この地域の作家たちが印をオーダーする同じ店で、伊藤の「伊」の文字を象（かたど）った落款用刻印を注文したことがある。二週間ほどで完成し、費用は一三〇ドル程だった。今回紹介した資料は二〇一〇年夏に収集したもので、作家が設定した売値は二五〇ドルだった。一五年以上使い込んだ思い出の品であり、自分の作品の品質を保証する印であるのに、買価の約二倍とは少々安価に思えた。もっと価格を高く設定したらどうかと聞いたところ、「印はそれ自体重要だけれど自分の作風は自分にしか表現できない。この印がなくても消費者は作品を見れば誰が作ったかすぐにわかるはずだ。だからこの値段でいいんだ」と、アーティストとして自信に満ちた返事が返ってきた。それから一年後、彼の工房を再び訪れる機会をえたので確認すると、同じサイズとデザインの印を使っていた。つきあいの長いバイヤーから、無印だと消費者が納得しないから、とのクレームを受け、再びオーダーしたらしい。信頼保証の重要性を再認識したと同時に、店までの往復約六〇〇キロメートルのガソリン代や手間を考えると、譲ってもらったことを申し訳なく思うのである。





元所有者は熊をトーテムとする氏族の成員。
右は熊の手を摸した金属印の頭部で、左がそれを刻印したもの

散策と思索の径

茨木の弁天さん——聖地の効用

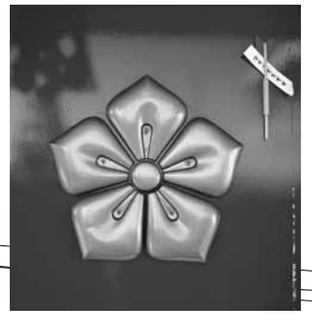
中牧弘允
民博 民族文化研究部

大阪府茨木の「弁天さん」は春の花見や夏の花火の名所として人びとに親しまれている。正式名称は飛龍山冥應寺（辯天宗本部）という。

辯天宗はいわゆる新宗教のひとつである。宗祖の大森智辯は寺に嫁ぎ、戦前から奈良県五條市の自坊で天啓に基づく宗教活動を展開していた。立宗は一九五二年である。

高校野球で有名な智辯学園はその宗門校にほかならない。

さまざまな研究者と訪れた。桔梗殿をバックにコーネル大学のロバート・スミス教授とナンシー・エイブルマン現イリノイ大学教授と筆者（1981年）



桔梗紋と正月飾り

水子供養塔とリハビリ訓練中の筆者

柳川啓一先生とV・ターナー教授

わたしは新宗教を研究テーマのひとつとしてきたが、辯天宗との出会いは職場や自宅に近い茨木ではなく、ハワイのホノルルであった。日本人移民と宗教についての調査をはじめた一九七七年、進出まもない辯天宗ハワイ支部をたずね、異文化布教の苦労話に耳を傾けたのが最初である。

その後、茨木の弁天さんには事あるごとに足をはこんだ。忘れられないのは宗教学の恩師、柳川啓一先生のお供で教団幹部にインタビューしたときのこと、また『儀礼の過程』などの著作で知られる高名な象徴人類学者、ヴィクター・ターナー教授をお連れしたときのことである。

柳川先生のインタビューは謙遜と低姿勢に特徴があった。そのとき、「お運び」という信者むけの研修が天理教の「別席」（九回受講することで「よふぼく」（信者）となる講習）にならったものであることが確認できた。教団幹部の方が天理教の元信者だったこともあり、競合する他宗教のモデルが参考になっていたのである。また、「宗祖五行のお諭し」が天啓として宗祖にくだったとき、それを幹部が必死に書きとめたときの様子もうかがうことができた。初対面にもかかわらず、ここまで教示してもらえたのは、先生の人徳によるところが大きかったようにおもう。

他方、ターナー教授は教団の紋章である桔梗に注目した。宗祖の生家の家紋が桔梗であるという教団側の説明に満足せず、あれこれ問うなかで、桔梗が漢方の御神示薬の原料になっていないかどうか質問された。幹部は薬草の細かいところまでは教えられていないと答えたが、後日、桔梗の含有が判明した。キー・シンボルないしドミナント・シンボル（支配的な象徴）というものは単純に見えるが多義的であると彼は力説した。ザンビアのンデンブ人のフィールドワークから導き出した理論を辯天宗の宗紋にも適用し、埋もれていた事実を見事に掘り起こしてみせたのである。ターナー教授をかこんで関西の若手研究者が参籠殿で夜更かししたのも懐かしい想い出である。

修練の場

わたしは一九八〇年、三三歳のときに突然、ギランバレー症候群という両手両足の急性麻痺に見舞われた。完治はしなかったが、予後は比較的よく、リハビリで筋力の強化をはかることが日課となっていた。弁天さんは入院していた病院に近く、その参道は登り坂なので、歩行訓練にはうってつけだった。当時、建設中だった水子供養塔をながめながら、一歩一歩、坂道をのぼりおりした。足でかせぐ人類学者としては、これで世界中どこへでも行くのだと念じながら。

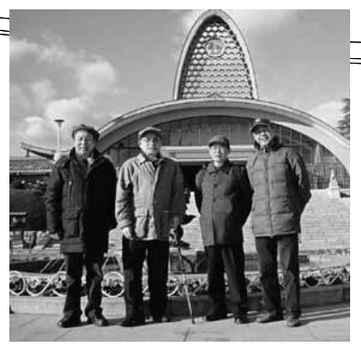
弁天さんは相撲取りにとっても修練の場となっていた。大阪場所（春場所）になると今はなき押尾川部屋が参籠殿を宿舎とし、プレハブ内の土俵で朝稽古に励んでいた。そこにサンパウロ大学のフェルナンド・デ・タッカ教授を案内したことがある。映像人類学を専門とする彼は、ぶつかった瞬間の力士の表情を写真に撮り、ブラジルや日本での個展につかっていた。

本堂の桔梗殿から一段下の広場には御百度石がある。信者は切なる願いを神仏にとどけるために御百度を踏む。これは苦行である。境内の片隅には笹川良一氏が五九歳のとき老母を背負って、金刀比羅宮の石段を七八五段登ったときの銅像がさりげなく設置されている。彼は宗祖と懇意の間柄であった。

かんがえてみれば、弁天さんは修行や苦行のテーマがいろいろ散在する空間である。個人的にはリハビリで苦労したところでもあるが、恩師や先達から「秘伝」をさずかった場でもあった。

桔梗殿にたどりつくと、遠く「俗界」の茨木や大阪の街が一望できる。登坂の到達点で達成感や開放感、あるいは一種の神聖感が味わえるのも聖地の魅力のひとつかもしれない。

行事の掲示板にみえる「お運び」



左より上海師範大学の蘇智良教授、筆者、曹建南副教授、楊剣龍教授（2011年）

笹川良一氏が老母を背負う像

多文化をあきなう

関西にフェアトレードを——「サマサマ」の心意気

小吹岳志（こぶきたかし）
フェアトレード・サマサマ事務局長

途上国の人びとの生活を支援する方法はさまざまだ。そのひとつにフェアトレードがあるが、経済活動そのものを支援するばかりでなく、その存在を世間に広くを認識してもらうことも、支援のひとつの形なのかもしれない。関西を中心に、フェアトレードの普及をはかるべく情報を発信し続ける「サマサマ」の活動を紹介する。

「お互いさま」の関係

フェアトレード・サマサマは、（社）アジア協会アジア友の会（略称JAFS）から独立する形で設立された。JAFSは、一九七九年「インドに井戸を贈る運動」として発足、アジア十数カ国に草の根のネットワークをもつNGOで、井戸掘りやパイプライン敷設、学校や診療所等の建設、識字教育・里親運動・環境保全運動等多くの国際協力活動を展開している。その活動のなかで、単に一方的な援助ではなく、途上国の人びとが自分たちの生産活動を通じて自立していくことをサポートする「サマサマ運動」が、一九八五年ごろから会員の活動として生まれてきた。やがて活動範囲が広がり取引額が拡大するにつれ、フェアトレードを専門に扱う団体として、一九九六年七月フェアトレード・サマサマ（当時はJAFSサマサマ）として独立した。

サマサマでは、ベトナム、タイ、ビルマ、ネパール、バングラデシュ、インド、スリランカの七カ国一〇の生産者団体とフェアな取り引きをおこない、おもに手工芸品を輸入・販売してきた。「サマサマ」とはマレー語・インドネシア語で、「お互いさま」「どういたしまして」という意味がある。そのことばどおり一方的な援助ではなく、地元の生産者団体とパートナーシップを結び、顔の見えるお付き合いをしてきた。さらにそれらの団体を通じて、軍事政権に追われたビルマ避難民孤児や、インド西部大地震の被災者、スリランカ・タイのインド洋津波被災者支援などにも活動を広げている。

フェアトレードの広報活動

サマサマの活動の初期のころはまだフェアトレードということばも知られておらず、それゆえ、教会やYMCA、学校などでチャリティとしての販売に頼らざるをえなかった。そこでフェアトレードの考え方を関西で普及させるため、二〇〇〇年ごろから人権問題や開発教育を進めるNGOと協力し、市民や学生を対象としたセミナー、ワークショップ、シンポジウム等を積極的に開催した。さらに、アースデイやフェアトレードデー、ワンワールド・フェスティバルなど、さまざまなイベントにも企画・出展してきた。

当初は「チャリティ」と「フェアトレード」の違いをなかなか理解していただけなかったが、当時のベトナムを始めとするエスニック・ブームにも乗り、徐々に製品を置いていただく店も増え、最終的に卸先は全国八十数店舗にまで広がった。しかし置いていただく店が増えれば増えるほど、クレームや返品の数も増えていった。いま思えばこのころは、「この商品を買っていただくことで、途上国の人びとの生活に寄与できます！」という想いばかりが先行し、肝心の製品の品質管理やマーケティングなど、買う側の立場に立った売り方ができなかったと反省している。日本と途上国とでは「契約」の概念や価値観に大きな違いがあり、「支援」と「ビジネス」の両立の難しさを実感した時期でもあった。

二〇〇四年には、兵庫県内の一三のフェアトレード団体、NGO、ショップなどと「フェアトレードひょうごネット」を結成した。さらに学生のネットワークや、公的機関や中間支援団体などとも協力して、フェアトレードの一般市民への啓蒙活動に努めている。最近は「市民が買い物を通じて気軽に参加できる国際協力」として、少しずつではあるが認知されつつある。特にチョコレートやコーヒー、バナナなど、自分たちが日常的に購入しているものがフェアトレードと関係しているということから、若い人たちや先生方の関心が高く、高校の総合学習や大学の国際開発論などで話す機会も増えてきた。その結果、学校の学園祭などで学生たちの協力による販売も増えている。

「関西フェアトレードマップ」

現在フェアトレード・サマサマは、『サマサマニュース』（メルマガ）を通じて、フェアトレード情報を発信している。国内外における新しい取り組みの紹介や、おもに関西におけるフェアトレード関係のセミナーやイベントの案内、サマサマが従来よりかかわってきたアジアの生産者団体の活動や商品紹介などを原則月二回配信し、より多くの人たちに関西におけるフェアトレード情報を提供している。

幸い関西でも二〇〇二～三年からフェアトレードをメインに扱う店も増え、また普通のスーパーやコンビニ、カフェ、さらには大学も含めていくつかの生協でもフェアトレード製品を手にとることができるようになってきた。それを多くの方に知っていただくために、二〇〇八年からフェアトレード・プロモーターズ（フェアトレードを推進する市民団体）やFTSN関西（フェアトレード普及を目的とした学生サークルのネットワーク）と協力して、「関西フェアトレードマップ」を作成し始めた。これを、お店や自治体の国際交流協会などに置いていただき、フェアトレード製品を買えるお店を紹介している。このマップのために毎年取材を重ね、初版では三七店にすぎなかった店舗数が、最新版では九四店にまでなった。

関西ではまだまだマスコミや行政、企業のフェアトレードに対する関心は低く、その広がりは限定的である。しかし「武力を用いない平和貢献・貧困削減」の手段として日本でも幅広く受け入れられるとわたしは考えている。そのためにも、フェアトレード・サマサマは今後も活動を続けて行きたい。

活動を紹介する授業（甲南女子大学にて）

フェアトレードマップ

織物ワークショップ（フェアトレードデーのフェア会場にて）

ビルマの軍事政権から逃れてきたカレン族の女性

スリランカの木工おもちゃの絵つけをする男性

バングラデシュの伝統的な刺しゅう・ノクシカタを製作する女性

CALENDAR 三月 第48回

歳時世相篇

ロシアの国際婦人デー

佐々木史郎（ささきしろう）
民博 民族文化研究部

ロシアには三月八日という、男性が女性をいたわり愛情を示す特別の日があるのをご存知だろうか。女性にとって年に一度のお楽しみであるこの日も、かつては女性を中心に、民衆自らが生活の改善を求めて立ちあがった記念すべき一日であったのだ。記念日も時代とともにその様相を変える。日本ではあまりなじみのない「女性を慈しむ一日」を紹介する。

女性に奉仕をする日

二〇〇九年の初春に極東ロシアの先住民の村を調査していたわたしは、危うくビザの有効期限中に帰国できなくなるところだった。村から空港のあるハバロフスクまで帰る前日になって、いつもは喜んで車を出してくれる村人たちの誰もが「出せない」といい出したのである。その理由を聞いてはたと思い当たった。その日は三月八日だったのだ。それはロシアでも有名な国民の祝日である「国際婦人デー」で、村の男たちはそれぞれの妻たちに奉仕しなければならない日だったのである。幸い、夫婦でドライブしたいという人がいたために、そこに便乗させてもらうことができたが、もう二度と三月八日に移動するような日程は組むまいと思った。

日本では三月三日のひな祭りを知らない人はいないが、三月八日の「国際婦人デー」を意識している人は多くはないだろう。しかし、海外ではこの日は結構重要な祝日なのである。

様相を変える国民の祝日

国際婦人デーの由来は、一九一〇年にコペンハーゲンで開かれた第二回国際社会主義者婦人会議での決議にあるとされている。初めて三月八日に実施されたのは一九一三年で、この年以後、毎年この日にヨーロッパの主要国で女性たちの集会が開かれるようになった。ロシアもそのような国のひとつだったが、この日は特に重要な意味をもっていた。というのは、一九一七年三月八日（ロシア正教が使うユリウス暦では二月二三日）の国際婦人デーに起きたデモがふくれあがり、軍隊の反乱を誘発して、皇帝退位にまで発展したからである。それが「二月革命」である。もともと社会主義運動から生まれた集会とデモの日であることと、二月革命の契機となったことが相俟（あいま）って、ソ連時代、三月八日は革命記念日（一一月七日）やメーデー（五月一日）と並ぶ重要な祝日のひとつだった。

社会主義体制を放棄した現在のロシアでは、この祝日の政治運動的な意味合いはほとんど失われている。それはすでにソ連時代から希薄になっていて、それに替わり、男性が女性を大切にする日という性格が強くなっていた。例えば、妻や恋人に花束を贈る、普段女性がしている家事をその日だけは男性が肩代わりするといったことが行事化した。女性たちの側から見れば夫や恋人、あるいは家族の男性成員たちの愛情を確認するという意識が強くなり、いわばバレンタインデーのような様相を呈していた。

わたしもソ連時代のロシアに滞在中に何度かこの日を経験している。残念ながらというべきか、幸運にもというべきか、わたしにはロシアに愛情を示すべき異性の知り合いはいなかったので、家事を肩代わりしたり、花束を贈ったりするという経験はないが、知り合いの女性たちがこの日を楽しみにしていたのはよくわかった。夫たちが料理や後片付け、あるいは掃除、洗濯など普段しなれていない仕事を一生懸命やっているのをにやにや横目で見ながら、同性の友人たちと思う存分おしゃべりをして過ごすのである。彼女たちにとってこの日は、一年に一度ほぼ完全に家事から解放されることが保証されている日なのである。

息子と孫から花束を受けとる女性（撮影 フィルソフ・ミハイル）

家事や育児は女性の仕事？

ところで、この日を過ごすたびに、わたしは社会主義国家ソ連における男女同権とは何だったのかということをいつも考えさせられた。

ソ連、ロシアでは労働の種類における男女差が小さい。重機類や大型トラック、電車、バスの運転といった危険を伴う職種でも、半数を占めるのではないかと思われるほど女性の進出が著しい。研究職や事務職は大半が女性である。しかし、その一方で、家事や育児の負担が彼女たちの肩に重くのしかかっていた。まったく家事や育児をしない男たちがいることは事実である。しかし、多くはできないわけではなく、手際が悪いために、女性たちがそれに我慢できずにやってしまうのである。

また、離婚や死別などで片親しかいない家庭では、子どもは母親や祖母が育てることが多い。女性が仕事に家事に育児にと八面六臂（はちめんろっぴ）の活躍をしながらも、日本ほど出生率が下がらなかったのは、保育園のような働く親のための育児支援施設が整っていたからである。

三月八日はそのようなロシア女性に対する男性たちのせめてもの思いやりというところなのである。しかし、一年に一日というところにやはり男性優位の姿勢が垣間見えてしまう。ロシアはまだまだ男社会なのである。彼らがアルコールに走るのも、女性の社会進出によってそれが崩されていくことへの不満と不安が影響しているという話もあるほどだ。

翻って日本の場合はどうだろうか。家庭のなかはいざ知らず、社会に出れば男性の優位性は盤石である。研究所や大学でさえ、教員には男性が圧倒的に多い。女性の進出が著しい職場や研究分野もあるが、彼女たちには家事と育児が立ちはだかり、三月八日の楽しみすらない。日本はロシアと比べてもまだまだ女性の能力を十分に活かしているとはいいがたい。ただ、三月八日を特別な日にすればいいというものでもない。男たちが常に家事や育児の半分を負担できるような制度や雰囲気を作っていく方が、社会の活性化への近道だということは皆わかっているのだが……。

【参考文献】 川口和子、小山伊基子、伊藤セツ 1980『国際婦人デーの歴史』校倉書房

フィールドで考える

アマゾンの森を歩く

池谷（いけや） 和信（かずのぶ）
民博 民族社会研究部

薄暗い森

森のなかの道を歩いていると、突然、けものの匂いがした。ハンターは道からはずれて樹木のあいだを急ぎ足で歩きだし、その姿は見えなくなった。数分後に彼はもどってきた。早朝にペッカリー（イノシシに似た動物）の一種サヒーノが数頭ここを通ったというのだ。近くには、数多くの足跡と直径一センチ余りの丸い糞（ふん）が十数個あった。どうやら、ペッカリーはこの場所にしばらく滞在していたと思われる。周囲には、彼らの好物であるナッツ類が数多く落ちていた。

これは、世界でもっとも大きな熱帯雨林が広がるアマゾンの森でのほんのひとこまである。わたしは、雨季にマメルトという名のハンターの狩猟に同行していた。彼は、朝六時ごろに川岸の高台にある家を出て、ショットガンを左の肩にかつぎ、右手には鉄製のカマをもって森を歩く。森のなかには整備された道が伸びているが、道をさえぎる木や草があると、立ち止まりそれらを取り除いていく。森のなかは薄暗く蒸し暑い。あつく積み重なった枯葉をふみつけて進む。途中、大木が自然に倒れる音がする。ジャングルが生きていると感じる瞬間だ。

ショットガンを片手にもつハンター

彼が、突然、立ち止まった。緊張が走る。耳をすましている。リスザルがいるという。高さ十数メートル以上のところにナマケモノがいるのを指差してくれたこともあったが、わたしはその姿を確認できなかった。ペッカリーの足跡だけではない。シカやカピバラのものもある。彼はおよそ五時間ものあいだ一度も休憩することなく歩き続けた。結局、この日は獲物と出会うことはなかった。よい夢を見ると猟の成功につながるという彼の口ぐせからすると、昨晩見た夢がよくなかったからなのだろう。

森から町へ

マメルトは、ペルーアマゾンに暮らすマイフーナ・インディオの若者である。彼らの総人口はわずか数百人で、国内の四つの村で暮らしてきた。もともと彼らは、アマゾン川の支流のさらに支流の上流部に散在して農耕や狩猟をおもななりわいとしていたが、一九六〇年代以降に、全体の三分の一の人は小学校のある下流部に集住するようになった。しかしマメルトは、上流部で離れて暮らす人の一人だ。

彼によると、別のペッカリーの一種であるファンガナは、五〇から一〇〇頭の群れをつくり森を移動するという。わたしは群れで川を渡るところを目撃したことはないが、その光景は圧巻であろう。ちょうど二週間前に、彼はファンガナを仕留めていた。そのときの皮が、家に置いてあった。隣人のメスチゾの男性から銃弾をもらっていたので、肉の半分は彼にわたしたという。皮は、小船で四時間近くかかる町で売る予定だという。

屋根裏の梁（はり）にかけられたペッカリーのあごの骨

アマゾン川の港町はどこでも、バナナ、キャッサバ、魚などいろいろなものが集まっていて活気がある。アマゾンの村が、孤立していないことを感じる。ペッカリーの皮も、仲買人の手によって、村から町、そして都市に運ばれる。しかし、この皮が、ドイツを中心として海外に輸出されているということはあまり知られていない。その総数が、ペルーのアマゾン全体で、年間一三万枚以上に達すると聞いて驚いた。皮は、ゴルフ用の手袋などに加工されて販売される。

町から世界へ

アマゾンは、世界最大の熱帯雨林が広がる地域としてはよく知られているが、わたしは、むしろ世界最大の商業狩猟の場でもあるととらえている。現在、世界のほとんどの国で自然保護が叫ばれ、獲物を捕獲する狩猟という行為が制限され禁止されているところも多い。地元のハンターが、狩猟という日常的な行為をしていて逮捕されることも少なくないのだ。

ペルー東部のアマゾンでは、日本とほぼ同じ面積の土地で年間一三万頭のペッカリーが狩猟で捕獲されており、長いあいだ毛皮が海外に輸出されてきた。ここでは商業的ではあるが持続的な資源利用がおこなわれてきた可能性がある。このことは、動物と人とをわけて動物を保護しようとする思想がますます普及している現在、地球上の動物と人との共存を考える際に注目すべき点だ。現時点では、マメルトがもっていた皮と世界の皮流通とのあいだにどのようなつながりがあるのかはわからない。しかし、わたしは、彼らと森を歩くことを積み重ね、森から世界へつながっていくという地球的な視野をもつことで、地球上の動物と人とのかかわり方について考えていきたいと思っている。

港町にある毛皮の店には大量のサヒーノの皮が積み重ねられていた

3月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間　14 時 30 分から 15 時 30 分
■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

※「たっぷりアメリカ――春のみんぱくフォーラム 2012」期間中はアメリカに関するお話をお届けします。

4日（日曜日）
話者：岸上伸啓（国立民族学博物館 教授）
話題：版画制作でつながるイヌイット社会と日本
場所：本館展示場内ナビひろば

11日（日曜日）
話者：齋藤玲子（国立民族学博物館 助教）
話題：北西海岸先住民の美術とトーテムポール
場所：本館展示場内ナビひろば

25日（日曜日）
話者：伊藤敦規（国立民族学博物館 助教）
話題：ホピの銀細工
場所：本館展示場内ナビひろば

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

意外かもしれないが、民博には標本資料の補修や修復を専門にする部門はない。収集した資料には基本的に手を加えない。つまり壊れたものも、部品の欠けたものもそのまま収蔵庫に保管される。材質や使用方法についてそのほうが正しい情報がえられる。その一方で資料の劣化や変色、虫害などには細心の注意をはらい管理されている。２７万点もの資料は定期的に二酸化炭素で殺虫され、日光や温度、湿度の変化からまもられている。夏、民博４階の灼熱の研究室で作業するわれわれよりよほど大事にされている。そんな標本資料もいったん展示場におかれるとほとんど無防備になり、急速に時の試練を経ることになる。どんな資料も現状維持がいかにむずかしいことか。何ごとにも永遠のいのちはかなわない。妄想はつい世の無常にまで至ってしまう。「歳時世相篇」と「散策と思索の径」は本号でおわり、４月からあらたなシリーズがはじまる。執筆者、おつき合いいただいた読者にこころより感謝したい。（庄司博史）

※今月号より「みんぱく　私の逸品」では、紹介する資料が展示されている場合、その旨を明記するようにしました。民博へ足をはこばれる際は是非「逸品」をご覧下さい。

●表紙：オセアニア展示場にあるモアイ（複製）
地域 チリ共和国イースター島　標本番号 H0009519

次号の予告

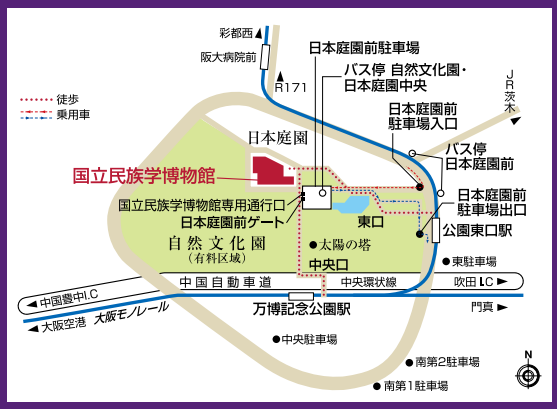
特集
考現学と民博

月刊みんぱく　2012 年 3 月号
第 36 巻第 3 号通巻第 414 号　2012 年 3 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　八杉佳穂
編集委員　庄司博史（編集長）　樫永真佐夫　川口幸也
久保正敏　菅瀬晶子　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/